

(1) 資産名称・概要

□ 名称 三 徳 山—信仰の山と文化的景観—

□ 概要

三徳山は中央貴族、近世大名等を始め多くの人々が信仰を寄せた山陰の霊峰である。ここには信仰によって結ばれた人と自然の良好な関係が今も持続しており、地域に守り伝えられた生活と文化がある。そこで、国指定名勝及び史跡三徳山（三徳地区）と名勝小鹿溪（小鹿地区）に未指定地（神倉地区）を含めて、三徳川と小鹿川に挟まれた山塊を保護すべき文化遺産「三徳山」として提案する。さらに、その周囲に広く緩衝地帯を設け、この地域も含めて適切に保全しながら、将来にわたって質の高い保存・管理・活用を図ろうとするものである。

霊峰として信仰を集める山は日本のみならず世界の各地に多くあって、それぞれの地域で独自の信仰が人々の間に受け継がれている。また、各地域には独自の生活文化や様式が伝えられている。多くの国宝・重要文化財を伝える三徳山は、そうした数ある宗教・信仰・習俗に関する同種資産の中にあって、既に国の名勝・史跡に指定された景勝地、信仰の場、宗教施設群としての価値が高いだけでなく、「人と自然の調和」という思想が顕在化した信仰の空間として、時代を超えて人と自然との関わりを示す文化的景観の顕著な事例である。

ところで、多くの霊峰が遠方からも認識されることを意識したかのような高峰であるのに対し、標高 900 メートルの三徳山は高さで遠望を誇るものではなく、知るものにしかその所在を認識できない山である。つまり、三徳山の信仰は単に峰の高さ、山容の美しさ、険しさに求められたものではない。三徳山には、一般的に標高 800 メートルより高い場所に生育するブナが標高 400 メートル付近から認められるように、標高に比して冷涼な環境を好む植生が形成されている。こうした自然環境が三徳山の神聖な雰囲気醸成している。また、三徳山の神聖な空間、その中に点在する奇岩、岩窟、滝は多くの修験者の信仰を集め、修験道場としての知名度を高めた。照葉樹林からブナ林帯へと変遷する植生の垂直構造が良好に残る自然林は今の時代に貴重なものであり、今も信仰の基盤をなす原生的な自然環境が三徳山には保全されている。

平安時代には天台宗三徳山三佛寺が建立され、蔵王権現を正本尊に祀る国宝奥院「投入堂」が建立される。投入堂は神仏習合を表す建築の最古例として貴重な建造物であり、今も三徳山信仰の象徴である。そして、この投入堂に至る道程は山林修行の場として行者道と呼ばれている。行者道には地形を巧みに利用した一筋の道があり、投入堂を目指す過程に仏教建造物群が配置されている。行者道を構成する仏教建造物群の特徴は、自然を改変することなく、急峻な岩場の地形と一体化した懸造によって建造されていることにある。三徳山信仰の中核をなす行者道は、三徳山特有の自然環境の中に神仏を見出し、自然環境との調和を目指す優れた設計思想を具現化している。人類の創造的才能を示す三徳山の景観は、開山して 1,000 年以上の時を経た今も、峰入りした人々に深く感動をあたえている。

また、鳥取県内には三徳山の歴史的背景となる重要な歴史・文化遺産が東西広範囲に点在している。国史跡伯耆国府及び国分寺・国分尼寺等の古代遺跡群、伯耆一宮経塚、平安時代から西日本最大の霊峰として多くの信仰を集めてきた大山等は、山林仏教寺院として顕在化する三徳山と歴史上の関わりが深い資産である。さらに、エンタシスの柱とパルメット文様で飾られた古代の石造物として知られる岡益石堂（陵墓参考地）、国史跡上淀廃寺跡から出土した法隆寺金堂壁画と並ぶ国内最古級の彩色仏教壁画等は、鳥取という地域がシルクロードを介し遠くヨーロッパ世界ともつながり、東アジア世界に大きな影響を与えた仏教文化が色濃く受容された地域であることを示している。

こうした歴史的背景、風土の中に育まれてきた三徳山を人類の貴重な文化遺産として提案するものである。なお、今回の提案後もさらなる調査研究を進め、資産構成を拡充していく。